The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 知覚主体と世界 : ベルクソンの知覚論から |
| Author(s) | 杉山, 直樹 |
| Citation | 待兼山論叢. 哲学篇. 1993, 27, p. 13-24 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/7739 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 知覚主体と世界——ベルクソンの知覚論から——

杉　山　直　樹

「私」とは多元的決定のもとにある語だ。『物質と記憶』がその多元性をことごとく論じたのでは勿論ない。例えば、あらゆる体験を内化してゆく〈有機的全体性〉としての「私」の提示は『試論』の一つの主題であった。また、社会的役割としての「私」、あるいは他者からの「呼びかけ」の下で独異化(サンギュラリゼ)されていくものとしての「私」といった次元の探求には『二源泉』を待たねばなるまい。

『物質と記憶』第一章 —— その主題は、知覚主体としての「私」はいかなる形象であるか、という点に限られている。ベルクソン自身の言葉を聞こう。「哲学者たちの間にはある種の精神的習慣ができあがってしまっており、それによって≪客観的なもの objectif≫と≪主観的なもの subjectif≫とは誰にとってもほとんど同じ仕方で画定されてしまっていた」(1318)。そしてその「境界線をずらす」(1316)ことこそが、知覚論の一つのテーマだったのだ。—— 明確にしておこう。再認や純粋記憶についての議論ではなく、「イマージュ」論こそが、問題の舞台だと彼は言っているのだ (cf. 1318)。つまり知覚世界と知覚主体との間の境界を再設定するものとして「イマージュ」論は読まれなければならないのである。

さて、彼が明示している論敵は「実在論」＝デカルト的な二元論と、「観念論」＝バークリー的な主観主義の二つである (*ibid.*)。それらを対照項としつつ、ベルクソンの観点を判明にしていくのがよいであろう。それを通じて、間接的な仕方で、知覚論の解明と吟味も果たされていくことを

期待したい。

## I

我々が最初に確認したいのは、論敵としての「実在論」がベルクソンにとってどのように理解されていたかである（本稿での「実在論」は以下の文脈で理解されたい）。

「実在論」は主客の差異を「空間的区別」（355）として捉える。例えば、非延長／延長（cf. 373-374 et passim）。内部／外部（176）。そしてもちろん、脳／外的事物。では、この区別のもとで、知覚はいかに理解されるだろうか？　事物の可視的「複製」（357）の所有である。複製の精度については見解が分かれよう。しかしいかに知覚が欺瞞なき忠実なものとしても、主観に属する知覚と別のところに、それと区別された客観的実物があることには変わらない。これこそ「空間的区別」の核心である。ベルクソンにとって「空間」とは内的属性の全く同じものをすら差異化しうる原理だったことを想起しよう（cf. 52-53）。そして以上のような「実在論」にとって、知覚は結局のところ「真なる幻覚」（215）と本質的には変わらないのだ。事物そのものといわば数的に区別される「複製」である点に関して、幻覚が特に劣るわけではない。そして付言するなら、〈いわゆる外的実在などは仮象、記号象徴（symbole, cf. 215）にすぎない〉という「観念論」も、内的印象と外的実在を基本的に別のものとしている限り、「実在論」と大きく異なるわけではない。

『物質と記憶』第一章の直接の批判対象は〈脳が外的世界の知覚を生む〉という物理生理学的学説であった。その学説は以上の文脈からすれば「実在論」の一例としてのより一般的な意味を持つ。それに対するベルクソンの批判点は正確にいって何だったのかを見なおすことは、「イマージュ」の含意とその導入の理由を明確化することにもなるはずである。

## II

純粋知覚説の提示にむけてベルクソンが確認していく主要な論点を整理すれば以下のようになろう。①私は身体を介して非決定的行為をなすように見える。②脳は、物質界の知覚のうちのほんの一部分でしかない。そのわずかな部分が逆に物質界の知覚を含んでいるなどというのは「まさしく自己矛盾」(171) であろう。③しかも脳に我々が見いだすのは伝播されていく様々な運動だけであり「行為〔＝作用 action〕にのみ関わる」(173) 事柄だけである。④とはいえ一方で、脳と知覚にはある相関があることも否定できない。

誤謬は、この④から、脳と意識的知覚の関係は「等価」(192, 959) 「産出」の関係であると結論することである。なぜ「誤謬」なのか？　誤解してはならない。ベルクソンは〈異なる実体の間に共通点はないから、物質＝脳が、意識＝知覚を生むはずがない〉といった批判を反復しているのではない。後論のために、少し立ち入って検討してみよう。

細部を排除するなら、ベルクソンは①の非決定性を原理として (cf. 182)、④の相関を説明したと言える。「〔意識的知覚と脳の変容という〕二つの項の相互依存性は、それらが共にある第三項、意志の非決定性に関連しているところからくる」(191)。脳を介してなされ得る可能的行為を、意識的知覚は反映しているわけだ。周知の〈可能的行為＝意識的知覚〉説である[1)]。

詳細はともかく、その発想そのものに驚かずにはいられまい。ひとが脳に見ることができるのはただ「行為に関する」ことだった。しかし今度はベルクソン自身が、「行為」は意識的知覚になりうる (cf. 186-7) と言っているのだ。不可解ではないか。「行為・運動に過ぎないものが、どうして突然光景となって与えられるのだろう」[2)]。彼自身も問うている、「どう

して、生物と周囲の様々に離れた事物との関係が、特に意識的知覚という姿をとるのか」(183) と。そして彼の解答。「意識を導出しようというなら、それは非常に大胆な試みであろう。しかし実際にはその試みは目下のところ不要である。というのも、物質界を措定することでイマージュの総体が与えられているのであるから」(185)。新たな謎に見えよう。しかし理解せねばならないのはまさにこの言明である。

そして、唯一可能な解釈は次のものであろう。脳が周囲世界の知覚を生むという学説においてベルクソンが見いだす不条理は、先の②に関わる背理、〈物質界の一部分である脳が、当の物質界を含む〉という〈部分と全体の逆転〉の背理、それだけなのだ。まさにそれ故に、逆に言って、脳というごく一部分にとどまらず、総体として「物質界を措定する」なら、そこから物質界の意識的知覚が「演繹」されてきても問題はないのである[3)]。「イマージュ」としての物質界は、知覚されるために余所から〈光〉に照らされることを必要とはしない、物質界には既に〈光〉が充満しているのだ (cf. 186, 188)。

このようにベルクソンが想定していたということは、さまざまな文脈から明白である。確認しよう。まず、「あるということと意識的に知覚されてあるということの間には程度の差異しかない」(187) という有名な主張は、以上の想定からのみ理解できよう。また〈物質界が「ある」のなら、その物質界の「意識的知覚」もそこに既に含まれていてよい〉というこの想定[4)]が、逆に問いを残すとすれば、それは〈では何故、現実には意識的知覚は物質界全体に及ばないのか〉というものになろう。だからこそベルクソンは言うのである、「説明すべきは、知覚がいかにして生じるかではなく、いかに限定されるかだ」(190, 原文イタリック)、と。さらに、物質界が「一種の意識のようなもの」というベルクソンの一見奇妙な言明 (353, 365) も、以上の「イマージュ」論の主張の別の表現である (物質が持続

する云々といったことが問題になっているのではない)。

ベルクソンの主張自体は以上のようなものである。我々が驚くものも当然であり、彼自身が「イマージュ」をめぐる以上の主張は「曖昧だと判断された」(1318) と認めるほどである。しかしながら彼にとっては、その無理解はある「習慣」、すなわち現実存在と見え姿との「分離」(162) の習慣の故であり、彼が求めるのはまさに「その分離を忘れること」(*ibid.*) なのだ。そしてこれはまさに次のことを意味しよう。我々が先に確認した構図、世界そのものと意識的知覚とを何らかの形で「分離」する構図を、ベルクソンはきっぱりと捨て去っているということ。そしてその故にこそ、世界は「イマージュ」として、つまり既に〈光〉に満ちた〈見えるもの〉として、自己呈示の力を持つものとして、措定されているのだ。全ての誤解は、知覚主体と世界とを別のところに立て、「イマージュ」を両者間の謎めいた媒介物として考えるところから生じる。

さらに付言しておこう。以上のような「イマージュ」論の成否にこそ、純粋知覚説の主張は全面的に依存している。実際、もしも「イマージュ」の導入がもたらす以上の帰結を認めずに「実在論」の構図をいくらかでも残すのなら、いくら「具体的知覚」から「記憶」と「感情的感覚」を取り除いたところで、たいしたものは残るまい。たとえ対象となる事物と全く同じ属性を備えていたとしても、あくまでそれは対象と区別されるものであって、ベルクソンが主張したい「真に事物の部分となる」(212) ような純粋知覚にならないことは自明だからである。

## III

「イマージュ」を導入してきた理由についてはいくつかのものが考えられよう。ただ、ベルクソンの見解では「イマージュ」の導入は、「どのような知覚理論もなしですますことのできない与件」の定式化 (189) であ

りそもそも「その発生を問う必要がない」(190) ような事柄なのである。つまり「イマージュ」の導入は不可避だとベルクソンは言っている (cf. 185, 360) のであり、その権利も、初めから一種論理的な必然として確保されているのである。

ここでは本稿の着眼点に沿って、「イマージュ」の向こう側に意識と無縁な「実在」を立てることの不可能性を確認しておくことにしよう。それを通じて、「実在」の複製として「イマージュ」を考えることの不可能性と、したがって「イマージュ」と質的な差異を持ち得ないものとして「実在」を考えることの不可避性が現れてこよう。

ベルクソンが別のところで言うように (969-971)、知覚に、その知覚そのものではない記述[5] を重ねる試みは、ただ一般的な主張である限りで整合的であるに過ぎない。そこで、具体的な語面での個別的なものについて語ることにしよう。例えばある光点Pが見えているとする (cf. 191-192) ——「Pのイマージュ」があるわけだ。ひとはこの可視的次元に「イマージュ」とは別の —— したがって不可視の —— ある「実在」の記述を結合しようとする。例えば、Pによる網膜への物理的刺激—視覚中枢へのある仕方での伝播。あるいは何か「イマージュとは別の本性のもの」(174) が「了解できないある作用」(*ibid.*) でこのPのイマージュを生み出しているという一種形而上学的な想定をしてもよい。

しかしいかなる記述をなそうとも、それが具体的にいってどのような知覚についての記述であるかは、当の知覚を与えられていなければ一切同定不可能であろう。「個別的な実在」(969) について語りだすや、その語りは知覚そのものを基盤とせざるをえない。そして逆に言えば、ある一定の記述が**この知覚の**記述であることが保証されるのは、ただその記述が知覚そのものから取られた場合である。つまり、見えている点Pが登場しないなら、その記述が**このP**の知覚**の**記述と言われる根拠はどこにもない。逆

に言うなら、例えばある生理物理的描写が**このP**の知覚**の**説明になるのは、その描写に既にPが、しかも**知覚されているまさにこのPとして**、導入されているからなのである[6]。Pの「イマージュ」はしたがって、初めから与えられていなければならないわけだ。

ベルクソンは簡潔にこう述べている。「もしPの視覚的イマージュが与えられていなかったとしたら、いかにそれが形成されるかを論究せねばならないところだ。そして人はすぐさま解きがたい問題に直面するであろう」(191)。実際「解きがたい問題」であろう。この場合ひとは、〈このPのイマージュが登場しない記述〉だけから〈このPのイマージュ〉という個的所与に到らねばならないのだから。そしてその記述がいかなる用語でなされようと事態は変わらない。そこに生じるのは論理的にいって解決不可能な問題であり、故に唯一の一貫した帰結は不可知論である。逆にそのような帰結を望まない限りは、「どのように論じようとも、まずひとはPのイマージュを措定せざるをえない」(*ibid.*)。誤解してはならない。「Pのイマージュ」とは、実物Pの「複製」、「見え」ではない。「見える」Pそのものなのだ。それ自身初めから可視的なものとして ―「イマージュ」として対象を規定する必然性はここにある。

## IV

ベルクソンによって導入された「イマージュ」によって、「実在論が立てた越えがたい障壁」(362, cf. 153) は崩壊し、私は「罰を受けた子供のように」(1361) 知覚される世界から切り離された存在ではなくなる[7]。我々はただちに、そこから出てくる帰結を確認せねばならない。知覚主体は世界とは別のところにいるのではなく、また同様に、知覚世界の一形象たる身体の内側に閉じこめられているのでもない。『物質と記憶』での「部分的合致」といういささか地味な表現の意味するところをはっきりさ

せよう。「我々は知覚する全てのもののうちに、現実に存在している」(1195, cf. M411) のだ。「……ビネ氏がどうして逆説的と思われるのか理解に苦しみます。いったいどうして私が私の覚知する諸事物のなかになど存在しようか、と彼は言います。私は答えましょう、いったいいかにしてあなたはそれらの事物を覚知する脳のなかに存在するのですか、と。真実を言うなら、あなたの自我は特定の外的事物の内にと同様、脳のなかにも存在しません。自我はそれが持つ表象が見いだされるところならどこでも至る所に存在しているのです」(M645)。

これが、世界における知覚主体の原初の姿である。私は脳や身体とまず結合して、しかるのちにそこから周囲を眺め始めるのではない。「私の意識は先ず、それが知覚するもの、また知覚し得るものの総体と（少なくとも部分的に）合致する」(M412) のだ[8]。

バークリー的な「観念論」への回帰だろうか。しかし、「イマージュ」の含意を「実在論」の批判を通じて吟味した今、「主観的観念論」は可能な問題設定として残っているだろうか。もはや実物／その複製といった構図は破棄されている。「イマージュ」が提示するのは、境界なき単一の存在領域なのだ。実際、無の観念を批判する際にベルクソンが立脚しているのも、この存在領域であった。「無」は、先行するこの存在領域に対して「教育的・社会的」(739, 744) な理由から事後的に加えられた「否定」による産物に過ぎない（だから「存在に先立つ無」が疑似観念とされたのである)。概念化された〈存在 existant／非存在 inexistant〉の対立も〈現実的 réel／観念上 idéal・可能的 possible〉の対立も (cf. 736-737)、この存在領域内部での相対的下位区分に過ぎない。

〈主観的／客観的〉の対立についても同様である。「イマージュ」は、本来、その概念的対立に先立つものとして考えられているのだ。「純粋な経験が存在し、それは主観的でも客観的でもない（私自身は、この種の実

在を指し示すためにイマージュの語を用います)」(M660)。つまり、ある水準においてはこう言い得るのである、「我々の表象は初めは非人称的 impersonnelle である」(195, cf. 184, 214)と。つまり、知覚主体は、原初的には「私」として自己限定するための差異を知らないものなのである。しかし現実には、その上に「我有化 appropriation」(M660) の水準が重なってくるのであり、そのときになって「主観的」と「客観的」の排他的述語づけが成立することになる。

この「我有化」の水準については、我々はいくつかのものを区別できるだろう。── まず「イマージュ」の総体としての物質界から意識的知覚が「選択」されてくる水準。── ついで「私の」身体の成立の水準。「私は一挙に物質界一般の内に身をおき、ついで次第に私の身体と呼ばれることになるところの行為の中心を限定する」(197)。ここにおいて心身結合の原的場面が縮減され、狭義の心身関係が成立する。ベルクソンがわざわざ「私の身体と私が呼ぶところのイマージュ image que j'appelle mon corps」といういささかくどい表現を用いている一つの理由はそこにある。身体が「私の身体」(196, 原文イタリック) になる水準があるのだ。「イマージュの総体の内に、……感情的感覚の座であり同時に行為の源泉である特権的な一つのイマージュが存在する。この特殊なイマージュをこそ、私は私の宇宙の中心として採用し私の人格の物理的基礎とするのである」(209)。我々が単なる観照的存在であったとしたら、あるいはこの水準は発動しなかったかもしれない (cf. M411)。しかし事実においては、我々は生き行為せねばならない。そしてそれ故に我々はこの一イマージュを、それが内部に持つ運動＝感覚性の故に我有化するのである。知覚論を害してきた内部／外部という問題枠 (176, 206) はここに初めて発生する。そこにおいては〈いかにして内的所与から外的実在に到達できるのか〉といった解決不能な問いしか、もはや成立できなくなっていよう[9]。

一方、知覚世界とは別の平面と交錯することによって、知覚世界の内に別の境界線が引かれてもいく。「イマージュ」内部での「客観性」の積極的設立の水準である。

多様な「イマージュ」の内部には「それ自身と、そして他の人々の経験と常に一致する安定した stable な経験」(202, cf. 365)、そしてその核としての「安定し固定化され、私の経験と万人の経験とに共通 commun で、……不変の法則に従っている事物」(198) が析出してくる。独立性、そして同意の対象。ベルクソンの観点においてはこれらの契機こそが「客観的秩序」の認定の動機となるわけである (cf. 210)。「イマージュ」は本来様々な意味・性質を孕んだものとして与えられてはいる。しかし、その多くのものは「他の人々の経験と一致」しないものである。それらは「客観的秩序」に対する余剰として「否定」的に —— つまり「教育的・社会的」な力場の中で —— 「主観的」領域に分類を余儀なくされていこう。「客観」と対立的な領域としての「主観」から出発する「主観的観念論」を可能にする構図の成立である。

『物質と記憶』のベルクソンは、以上の一種排除的な営みをなんら否定するわけではない。むしろ彼はその営みを「物質についての次第に深められる認識」(199) として積極的に容認することになろう。例えば失認症の事例は、一見自明な事物の意味規定をも「客観的」領域から排除し得よう(事物の意味は、私の記憶に由来する)。物理学の知見は、赤という感覚質をすら「主観的」なものに追いつめていこう (感覚質は、私固有の持続のリズムに由来する)。こうして「物質」は「科学」の下で極めて「客観的」なものに彫琢されていく。にもかかわらず、以上の次第からして知覚と科学は連続的なものとされたのであった[10]。

しかしいずれにせよ、知覚そのものを論じるためには派生的な主客の構図から出発してはならないことに変わりはない。本稿では何よりもその点

を強調しておくことにしよう。

## 結　論

以上が『物質と記憶』の提示する、知覚世界における限りでの「私」の姿である。すなわち、根源的には世界に非人称的なものとして内属し、ついで a)行為の要求のために「私の身体」の内奥に「自己を限定し」、また b)社会的な文脈の下で「一種の内的で主観的なヴィジョン」(184) の所持者に縮減されていく、そうした不定の形象が「私」なのだ。その派生的な「私」を「現実の分節」(1292) に対応するものと見做し、知覚論の出発点に用いることができると考えたところにこそ、知覚論における「実在論」と「観念論」双方の失敗はあった。そうした派生的「私」を生んだ行為の必要・社会的生の要求は、それなりの存在意義を持つ。しかしそれは同時に疑似問題の源泉でもある。それ故に、こと知覚論におけるベルクソンの課題は、まず第一にその「私」の還元にあったのだと言えよう[11]。

### 注

ベルクソンの著作からの引用ならびに参照箇所については、PUF版著作集 *Oeuvres*、雑録集 *Mélanges*（記号Mを付す）の頁数を用い、文中括弧内の数字で示す。

1) ただし行為＝知覚というあからさまな同一視の表現は多くない（186–7, 363)。知覚は可能的行為を、dessiner, exprimer, mesurer するというのが普通の表現である。
2) A. de Lattre, *Bergson, une ontologie de la perplexité*, P. U. F., 1990, p. 67.
3) 注意すべきだが、我々は今既に「純粋知覚」説の内部に入っている（純粋知覚説は**意識的**知覚の説明理論なのだ)。したがって「記憶」は解釈に用いることができない —— 例えばユードの説のごとくには。Cf. H. Hude, *Bergson*, Editions Universitaires, tome II, 1990, pp. 66–68.
4) メルロ＝ポンティもベルクソンの知覚論を、身体論を超える一つの存在論として既に捉えていた。「ベルクソンが言うには、私の眼差しのもとでの

事物の充溢といったら、まるで私の視覚は私のうちではなく事物の内で生じるごとくであり、また、見られてあるということは、事物の卓越した存在の低減にすぎないかのようなのです……」(M. Merleau-Ponty, "Bergson se faisant", in *Signes*, Gallimard, 1960, p. 233.)。

5) その記述内容が、因果系列であるか平行的過程であるかは、本質的ではない。

6) 事実、生理学的説明の常套手段は、最初に当の知覚対象＝イマージュを刺激源等として提示しておきながら、あとで脳だけを孤立させ、そしてその脳内部の状態だけから対象の知覚が生じたように見せることである (cf. 175–176, 190)。

7) 一見素朴にすぎる彼の〈自然哲学〉的傾向は、以上の論点と無縁ではない。

8) のちの『二源泉』には、五体を持つ「微小な身体 corps minime」ではない「広大なる身体 corps immense」・「我々の無機的な大身体」(1195) といった奇妙な概念すら登場するが、その含意もここにあると言えよう。

9) 勿論その〈内的所与〉は〈身体内部〉の意味を超えてより抽象化・非延長化されはしよう (cf. 208)が、問題の構制には変わりがない。

10) 本稿は「収縮する記憶力」による、物質の運動と感覚質との関係づけについては立ち入れないが、次の点だけは指摘しておきたい。物質の微細な運動と感覚質との関係を問うベルクソンは、「実在論」的な構図をまず破棄し、そして「我々には選択の余地はない」(339) と述べ、感覚質そのもののうちに運動は置かれるしかない (340) と言い、知覚世界と科学の記述対象との〈同定〉に向けて「収縮する記憶力」の問題系を論じていく。つまり、前提となる論理は第一章のそれと同じであり、ここでも「イマージュ」論の成立が前提をなしているのである。

11) 知覚＝「イマージュ」の世界と、「教育的・社会的」事象の次元＝「対話者」(739) の存在する次元との関連については本稿では措かせていただく。ただベルクソンにとって社会性という次元は、哲学という営みに対してより上位の審級であり続けたように思われる —— 独我論的懐疑の徹底的不在、「集団的努力」(493) という哲学観を想起していただきたい。

(大学院後期課程学生)